

「一遍踊って死んでみな」時代資料

I. 年表

1239年(延応元)	1歳	伊予国道後に生まれる。父は河野通広、幼名は松寿丸
1248年(宝治2)	10歳	一遍の母、没。出家して随縁と名乗る
1251年(建長3)	13歳	大宰府に渡り、聖達、華台のもとで浄土宗西山義を学ぶ。智真に改名する。
1263年(弘長3)	25歳	一遍の父、没。帰国して還俗し、結婚する
1271年(文永8)	33歳	春に再出家。善光寺に参籠して二河白道図を見る
1273年(文永10)	35歳	7月、伊予国菅生の岩屋に参籠する
1274年(文永11)	36歳	2月、遊行の旅に出る。摂津国四天王寺に参籠する。その後賦算を始める。高野山金剛峯寺に参詣する。熊野本宮証誠殿に参籠し、熊野権現の啓示を受ける。「六十万人の頌」と「六字無生の頌」を作る。妻子を捨てる。文永の役
1275年(建治元)	37歳	秋、伊予国に帰る
1276年(建治2)	38歳	筑前国のある武士を訪ねる。大隅国正八幡宮に参籠する。九州一周する。
1277年(建治3)	39歳	他阿弥陀仏真教たちが入門する。
1278年(弘安元)	40歳	夏、門弟たちと共に伊予国に帰る。秋、安芸国厳島神社に参詣する。備前国藤井の領主の家を訪ねる。備前国福岡市で280人余りが入門する。他阿が入門。
1279年(弘安2)	41歳	春、京都因幡堂に泊まる。信濃国善光寺に参詣する。年末、信濃国佐久郡伴野で踊り念仏を始める
1280年(弘安3)	42歳	下野國小野寺に参詣する。陸奥国江刺の祖父河野通信の墓に詣でる
1281年(弘安4)	43歳	奥州松島、平泉、常陸国を通して武蔵国に入る。弘安の役
1282年(弘安5)	44歳	3月、鎌倉に入ろうとして阻止される。片瀬浜の地藏堂に入り踊り念仏を行う。人気があき上がる。伊豆国三島神社に参詣する。
1283年(弘安6)	45歳	尾張国甚目寺で法要を行う
1284年(弘安7)	46歳	近江国関寺に参詣する。比叡山横川の真縁と面会する。閏4月、四条京極の釈迦堂に入る。貴賤の大歓迎を受ける。空也の遺跡市屋の道場に入り道場の再興を図る。四十八日の念仏興行を行い、その後もしばらくここに住んで空也の遺徳をしのいだ。
1285年(弘安8)	47歳	北国を巡る。丹後国久美で沖合に龍が現れる。但馬国久美で高潮が押し寄せて道場が潮の中に没する。伯耆国、美作国では一宮中山神社を訪れたら神殿の後ろの山が鳴動する、神御供の

		釜ががたがたと鳴って二、三町響きわたる。
1286 年(弘安 9)	48 歳	<p>摂津国四天王寺に参詣する。仏舎利の壺が開かなくなっていたが、一遍が七日間の祈請をしたあとに二、三度振ると転がり出てきた。</p> <p>住吉神社に参詣の後、聖徳太子廟(古墳)で三日の参籠。奇瑞を感じ、他阿弥陀仏に命じてさらに念仏を勤行させた。同時に一面の鏡を施入して、太子廟の御帳の後ろに掛けた。観無量寿経に、鏡をもって仏力観成と説くからで、彼は心ひそかにその意を寓した。その後、大和国当麻寺に参詣。</p> <p>冬の頃に石清水八幡宮に参詣。八幡大菩薩の託宣を受け「極楽にまいらむとおもふころにて南無阿弥陀仏といふぞ身心」の歌を詠む。</p> <p>その後、淀の上野というところに踊屋を設けて踊り念仏を興行していた。ある日、大炊御門二品禅門信輔が団扇を持って見物していたが、その柄が汚れているのを見た一遍はその団扇を借りると、小刀を取り出してその汚れを削り取ると、そのまま返した。年末、四天王寺に参詣する。平素互いに行き来をしていて深く交わっていた如一上人と二十八日に面談をする。すると翌一日の明け方に如一は頭を北に、顔を西に向けて往生してしまった。一遍は手ずから手厚い葬送の礼を執り行った。</p>
1287 年(弘安 10)	49 歳	<p>土御門大納言源定実が尼崎まで送ってきて歌の贈答をする。播磨国印南野の教信寺に一宿する。</p> <p>春、播磨国書写山円教寺に参詣する。本尊を参拝したいと頼むが、久修練行の常住僧のほか、かつて後白河法皇に一度許したとき以外は許したことがないと断られる。だが、一遍は四句の偈を奉納し、協議の結果、この聖は他と違って黙止しがたいとして特別に許可が与えられた。一遍はひとり内陣に入り、本尊を拝んで涙を流した。</p> <p>その後は国中を巡礼し、松原八幡宮に参詣した時に「別願和讃」を作る。</p> <p>備中の軽部というところで、花の下(もと)の教願という僧が一遍に会うことを願ったので訪れて臨終を看取る。教願と一遍で歌のやりとりをする。</p> <p>その年の春、十二道具の心得を書く。</p> <p>備後国一宮(吉備津神社)を通りかかり参詣する。突然の訪問に社家たちはあわてふためき、上人の供養に舞楽でも奏したらと、長らく絶えて舞わなかった秦皇破陣楽を演じた。</p>

		<p>厳島神社を参詣して舞を鑑賞する。</p>
1288年(正応元)	50歳	<p>伊予国菅生の岩屋を訪れる。 繁多寺に三日間参籠し、父伝来の「浄土三部経」を奉納する。 十二月十六日に船を差し出して大山祇神社に参詣する。</p>
1289年(正応2)	51歳	<p>讃岐国善通寺と曼荼羅寺に参詣する。 阿波国大島の里で病気になる。6月1日には寝食常ならずの状態になり「おもふこと みなつきはてぬ うしとみし よをばさながら秋のはつかぜ」の歌を詠む。だが、病気は日を重ねるほどにひどくなっていったが、行儀は変わる事はなかった。 7月のはじめ、淡路島の福良に移る。淡路の二の宮に参詣。二の宮で踊り念仏を行うシーンが一遍聖絵に描かれる。 淡路島の志筑という所(洲本の北)に北野天満宮を勧請したところがあり、そこに参詣しようとしたが一旦は断られる。だが社殿に「よにいつる こともまれなる月影に かかりやすらむ みねのうきくも」の歌が現れ、神主たちは驚いて一遍たちを迎え入れる。一遍は頼まれて揮毫する。</p> <p>7/18 摂津国明石の浦に移る。一遍は印南野で臨終を迎えたが、どこの地でも利益は同じで縁に任せるべしと兵庫観音堂に移る。 兵庫観音堂に入る。 8/2 遺誠を示す。 8/9 から七日間、紫雲がたなびく。一遍はこれは臨終ではないと言う。 8/10 所持の書籍等を焼き捨てる 8/17 一遍の容態が急変、一遍は西に向かって十念(十回念仏を唱える)した。たまたま聖戒は浜の方に出ていて慌てて戻る。 8/18 わしの目の中に見える赤い筋が消えたら臨終だと聖戒に告げる。 8/21 午後 皆に踊り念仏を所望する。終わると門弟ばかりを集め、頭を北に、顔を西に向けて念仏を唱えた。西の宮の神主が駆けつけたので十念を授ける。 8/23 朝7時 法要中に亡くなる。7人が海に身投げする。</p>

「一遍聖絵」のラスト

「たがひに西刹の同生をちぎりて、ここにわかれ、かしこにわかれし心のうち、すべて詞のはしものべがたく、筆の跡にも記しがたくこそ侍しが、まさにいま遺恩をになひて報謝しがたく、往

事をかえひみて忘却する事をえず。しかるあひだ、一人のすすめによりて、此画図をうつし、一念の信をもよをさむがために、彼行状をあらはせり」
(一人は「いちのひと」で、勧進してくれた支援者のことを指す)

II. 関連人物の生没年

法然	1133-1212 年	1175 年	浄土宗を開く (治承寿永の乱 1180-1185 年)
栄西	1141-1215 年	1191 年	宋から帰国して布教開始
		1198 年	鎌倉に下向する
親鸞	1173-1263 年	1214 年	常陸に向かい東国で布教開始
		1224 年	教行信証の草稿が完成
道元	1200-1253 年	1233 年	「正法眼蔵」初巻
日蓮	1222-1282 年	1252 年	専修題目を唱えはじめる
一遍	1239-1289 年		
聖戒	1261-1323 年		(22 歳年下の弟 or 甥)

以上